

小学校外国語教育におけるタスク志向の授業実践 ー協同学習とファシリテーション技術を用いたエンパワメントな授業を目指してー

中山 愛 恵*・大 場 浩 正**
(令和6年1月26日受付；令和6年4月3日受理)

要 旨

本稿の目的は、小学校外国語科においてコミュニケーションの前提となる温かな人間関係を築きながら、児童が主体的に英語でコミュニケーション活動に取り組む姿を目指すために行った、協同学習の理念と技法及びファシリテーション技術を用いたタスク志向の授業実践について報告することである。毎時間、児童を励まししながら「失敗、間違いOK!」を合言葉に、パフォーマンス課題に向けて、目的意識と相手意識を明確にした言語活動の実施など、児童は、仲間と協力して学びながら小さな成功体験を積み重ねていった。その結果、児童の協同学習への意識及び協同的に学ぶ意欲を高めることに有効に働いたことが分かった。それは、協同学習やファシリテーション技術の導入により、児童の安心・安全な学習参加につながったことや、そのような学習環境下において、共通の目標をもって仲間と練習を積み重ねたことが、児童同士の関係性の深化と知識・技能の獲得につながったことによるものと思われる。また、留学生を含む外部ゲストに、仲間と協力しながら自分の思いを英語で伝えることができた喜びを感じ、その達成感が英語への自信、学習意欲および国際的志向性の高まりに寄与したことが明らかになった。

KEY WORDS

Elementary School Foreign Language Education 小学校外国語教育 Task-Oriented タスク志向 Cooperative Learning 協同学習 Facilitation Techniques ファシリテーション技術 Empowerment エンパワメント

1. はじめに

文部科学省（2018）において、子どもたちが生涯にわたって能動的に学び続けられるようにするために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。また、外国語科においては、具体的な課題の設定や、児童が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションの目的・場面・状況を意識し、知識及び技能を実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ることとしている。これらのことから、外国語教育においては、タスクを志向した授業実践が重要であると考えられる。なぜなら、高島（2005）が、タスクを「現実社会での言語使用を学習者に教室内でシミュレーション的に疑似体験させる言語活動」（p. 5）と位置づけているように、タスクの遂行においては、日常生活に関わる具体的な課題設定を行い、児童が目的意識と相手意識をもってコミュニケーション活動に臨むことのできる学習活動を重要視しているからである。

しかしながら、このようなコミュニケーション活動の実現に向けては、児童同士がよりよい人間関係の中でお互いを尊重し、そして協同的にお互いを高め合うような関係づくりが必要であるだろう。そこで、本実践では、協同学習の構成要素とファシリテーション技術を用いたタスク志向の授業実践を通して、児童をエンパワー（応援、支援）しながら、児童の主体的な英語でのコミュニケーション活動に取り組む姿を目指した。

2. 実践の背景

中央教育審議会は、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（令和3年1月26日）を取りまとめ、主体的・対話的で深い学びの実現のためには、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることが重要であると示している。そして、教師に求められる資質・能力の1つとしてファシリテーション能力を挙げており、互いを尊重し合う互恵的な人間関係の構築と、互いの学習を補完し合い個別最適な学びを子どもたち自らつくり出していけるように、教師はファ

シリテーターとして子どもたちを支援していくことが求められている。ちょん (2016) によると、ファシリテーションとは、ファシリテーターが使う良好なコミュニケーションを育むチームマネジメントスキルであり、それによってチームでの合意形成や課題解決が効率的、効果的に進むようになる。ファシリテーターは以下の6つの技術を用いて、参加者一人一人のもつ個性や多様性を生かしながら、共通のゴールに向かう道筋をつくる。

- ① インストラクション (指示・説明)
- ② クエスチョン (質問・問い立て)
- ③ アセスメント (評価・分析・翻訳)
- ④ フォーメーション (隊形)
- ⑤ グラフィック (可視化) & ソニフィケーション (可聴化)
- ⑥ プログラムデザイン (設計)

また、「協働的な学び」の充実に関して、協同学習とは、一人一人が個人の責任を果たしながら、互いに認め高め合い、グループのメンバー全員で目標達成を目指す理念と技法である。Johnson, Johnson, and Holubec (2002) は協同学習の5つの基本的な構成要素を提唱している。すなわち、(1) 互恵的な協力関係、(2) グループと個人の責任の明確化、(3) 対面での促進的相互交流、(4) 対人的技能の獲得と使用、そして(5) 活動に関する振り返りの設定である。また、Kagan (2013) は、協同学習の原理においてJohnsonたちの(1)と(2)に加えて、「参加の平等性が確保されていること」と「活動の同時性に配慮していること」を協同学習の要素としている(佐藤・関田, 2021)。

「タスク志向の授業実践」について、Ellis (2003: 9-10) は、タスクは作業計画であるとし、(1) 言語を使う目的がある、(2) 意味内容の伝達が第一義である、(3) 話し手間に、情報・考え等に何らかの差がある、(4) 言語使用の現実世界のプロセスが含まれる、などと定義している。また、志村ほか (2015) は、コミュニケーション活動のタスク性の高さの判断基準として、「活動の結果として何か成果物が残るものや、その結果が行動として表れるもの」(p. 115)としている。以上を踏まえ、(1) 言語を用いて課題解決する目標がある、(2) タスクは児童にとって身近な内容である、そして(3) 活動の終わりに結果として成果物が残る、の3点を重視して単元構成を行った。

3. 実践の内容と方法

- (1) 実施時期 2023年5月中旬～7月初旬
- (2) 実践対象者 新潟県内の公立小学校 6年生31名
- (3) 実践単元 本実践は、教科書 (NEW HORIZON Elementary 6 English Course) のUnit 2 How is your school life?及びUnit 3 Let's go to Italy.の2単元において行われた。以下では、Unit 3を中心に実践内容を述べる。
- (4) 単元構想 児童が、英語を使ってコミュニケーションを行う喜びや楽しさを味わえる活動にするためには、コミュニケーションへの意欲 (Willingness to Communicate: 以下WTC) を高めることが重要であると考え。そのために、「旅行代理店の店員になり、ゲストが日本との違いを知り、テンション爆上げで旅行に行きたくなるように、おすすめの旅行プランを紹介しよう。」という最終タスクを、単元の1時間目で児童と共に設定し、児童が相手意識と目的意識をもって活動に取り組めるようにした。物井 (2015) は、「国際的志向性という漠然としているが英語が象徴する異文化への親しみは、小学生から英語の学習意欲を高める」ことを示しており、本実践のゲストに近隣の大学の留学生3名を含めることによって、児童が海外へ興味を持ち、英語でコミュニケーションを図りたいという意欲向上をねらった。表1の単元計画作成にあたり、児童が英語を使ってやり取りをする目的・場面・状況を明確にして単元ゴールを設定し、ゴールに向けて行う学習のつながりを意識して単元構想を行った (新潟県教育センター英語教育推進チーム, 2018)。単元の2時間目でパフォーマンス課題とルーブリックを提示し、見通しをもって学習できるようにした。また、学習のルールと授業のスケジュールを常に掲示し、児童がいつでも確認できるようにした。

以下では、どのように協同学習の理念と技法及びファシリテーション技術を活動に取り入れたかを述べる。

- ① ミニホワイトボードを使ったリスニング活動と言語活動
様々な国のおすすめプラン (その国でできること) について、自作のイラストで可視化し、児童と対話をしながらリスニング活動を行った。そこで、協同学習の技法の1つである「雪玉転がし」を使い、まず、児童は聞き取れた情

報を1分間でできるだけ多くミニホワイトボードに記入する。そして、ペア、次に4人グループという順番で書いた情報を共有しながら、ミニホワイトボードに情報をどんどん増やしていった。共有する際、協同学習の技法であるRally Robin（交互発言法）とRound Robin（輪番発言法）を使い、参加の平等性を確保した。一人よりもペア、ペアよりも4人と、得られる情報が増えていくことで、協同で学習する意義を感じられるように意識して活動に組み込んだ。

言語活動については、授業冒頭のSmall Talkとリテリングの要素を含む活動を取り入れた。言語活動の対話で使用する質問（オープン・クエスチョン）とあいづち（大場, 2020; ちよん, 2016）を黒板に掲示し、児童がいつでも確認できるように可視化することで、互いに好意的な関心の態度で豊かな対話を育み、相手の思考を深めることを目指した。リテリングの要素を含む言語活動は、複数の国についてのリスニングを終えた段階で取り入れていった。これまで学習してきた国についての情報をペアに伝え直し、どこの国であるか当ててもらおう活動である。一方はどこの国かを知っていて、他方は知らないというinformation gapがある状況を作ったことで、相手に伝えようとする意欲と、相手の話をよく聞いて答えを導き出そうとする児童の姿を期待した。解答者は、分からないことは相手に聞き返したり、情報を共有するために質問することで、出題者が一方的に話すのではなく、二人でやり取りをしながら協力して取り組めるようにした。

表1 Unit 3の単元計画

時	◆本時のめあて	・主な学習活動
1	◆Unit 3の学習と単元ゴールのイメージをもつことができる。	・パフォーマンス課題の内容を理解する。 ・外国でできることを聞き取り、ミニホワイトボードに書く。
2	◆イタリアと中国のおすすめ旅行プランを聞き取ることができる。	・ミニホワイトボードを使用し、どこの国かを当てる3ヒントクイズを行う。 ・外国でできることを聞き取り、ミニホワイトボードに書く。
3	◆友達に、ある国の旅行プランを伝えることができる。	・ペルーとドイツの旅行プランを聞き取り、ミニホワイトボードに書く。 ・ペアで協力して国当てクイズに取り組む。
4	◆チームで協力して、ゲストに紹介する国と内容を考えることができる。	・ペアで協力して国当てクイズに取り組む。 ・チームで協力して紹介する国と内容を決める。
5	◆チームで協力して、発表原稿と資料を作ることができる。	・ミニホワイトボードにメモを取りながらチームで話し合い、紹介内容を決めて原稿に記入する。 ・発表資料を、タブレットで作成する。
6	◆ゲストが行きたくくなるような紹介にするために、チームで協力して発表練習を行うことができる。	・一人一人が練習のめあてを決める。 ・「練習→録画→振り返り→一人一言励ましコメント」の順で、練習を行う。
7	◆ゲストが行きたくくなるような紹介にするために、チームで協力して発表練習を行うことができる。	・一人一人が練習のめあてを決める。 ・ゲストの質問に全員が答えられるように練習する。
8	◆ゲストが旅行に行きたいと思ってもらえるように、チームで協力しておすすめ旅行プランを紹介する。	・チームで協力して発表する。

② 個人の役割の明確化

一人一人が自分の役割を自覚し、責任をもって活動に参加できるような役割を設定し、それらを、図1にあるような役割分担カードにして各活動の前に児童一人一人に配付した。役割分担の詳細は以下の通りである。活動中には、そのカードを見えるところに置いて意識して活動するように促した。

- ・進行係： グループの活動が課題からそれないように気をつけて、進行をする。
- ・時間・教材係： 制限時間を意識した声かけや必要な教材が揃っているか等の確認をする。提出物を集め、人数分あるか確認をして提出する。
- ・さつえい係： やり取りをしている人が、全員画面に収まるように撮影する。動画や写真の扱いに気を付ける。
- ・励まし・褒め係： 仲間のことを褒めたり、励ましたりする声かけを率先して行う。全員が活動に参加するように声をかける。

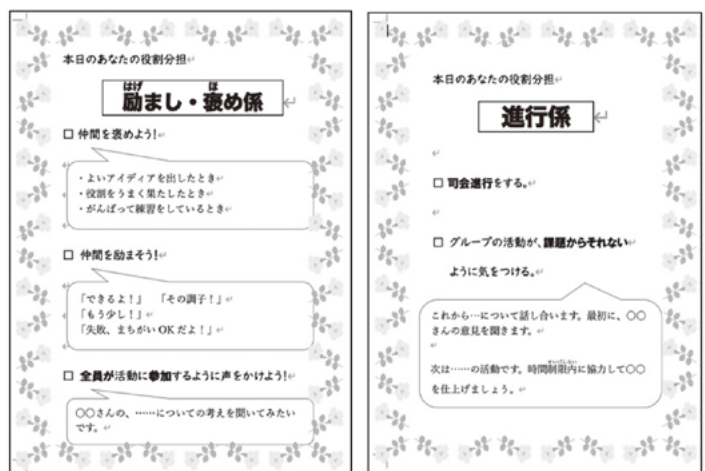


図1 役割分担カード（一部）

③ 振り返りカード

毎回の授業の終末に振り返りの時間を5分程度設定し、自分の学びを振り返りカードに記入するようにした。図2は、第6時と第7時で使用し振り返りカードである。パフォーマンステストに向けてチームで協力して練習を行う回は、個人の目標を決めて練習し、それを振り返ることができるカードにした。また、振り返りカードの表紙にはループリックをつけ、各項目を意識しながら発表練習に取り組めるようにした。ループリックの内容は、一目で分かるような、児童にとって読む負担感の少ないものにするために、できるだけシンプルな形式のものにした(表2参照)。

⑥【パフォーマンステストに向けてパート1】よりよい発表になるように、友達とアドバイス合おう!

目標	
目標に対してどうだったか? (10点中何点?) 理由は?	(/ 10)
言いたかったけれど、 言えなかった英語	
次はどうしたいか。	
⑥	今日の学習で、単元のゴールに近づくことができた。 5 4 3 2 1
1	ペアやグループのために、自分にできることをした。 (意見を言う、進んで道具を準備する、相手の話をよく聞く、など) 5 4 3 2 1
●ペアやグループの活動において、できたことに ○をつけよう。(いくつでも可)	
・eye-contact (相手の目を見て 話したり、聞いたりしよう!)	
・温かなコメント (いいね! できるよ! 失敗まちがいOKだよ! もう少しだね! など)	
・あいづち (Me too, Uh-huh, I see, Really, など ※日本語のあいづちもできたらOK!)	

図2 振り返りカードの例

表2 児童に提示したループリック

	知識・技術	思考力・判断力・表現力	態度
	おすすめの旅行プランについて、伝えることができる。	相手が日本とのちがいを <u>知り、テンションを上げて旅行に行きたくないように、おすすめの旅行プランを伝えようとしている。</u>	①eye contact ②clear voice ③speaking speed
A評価	正しく伝えることができている。 (文、単語)	・あいさつ ・その国でできること (食べる、買う、見る、 <u>楽しむ、訪れる</u>) ・できることの感想 (It's~) ・お客からの質問に答えられる。	3つできている。
B評価	少し間違いがあるが、伝えることができている。 (文、単語)	・あいさつ ・その国でできること (食べる、買う、見る、 <u>楽しむ、訪れる</u>) ・できることの感想 (It's~) を話すことができている。	1~2こできている。

(5) 活動例 Unit 3 Let's go to Italy. (4時間目)

表3は、表1の単元計画に沿って行った実際の授業の活動例である。4時間目は、リテリングの要素を取り入れた言語活動と、パフォーマンステストで紹介する国と内容についてチームで相談する活動を主な活動として位置づけた。図3は、Activity 2の時に児童が役割分担をメモしたホワイトボードである。

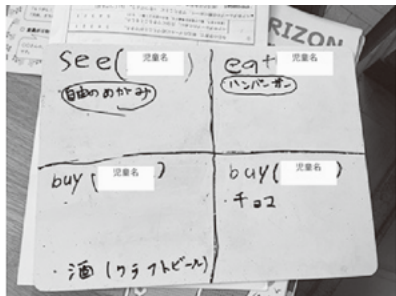


図3 児童が作成したメモ

表3 活動例

本時のねらい: チームで協力して、ゲストに紹介する国と内容について考えることができる。		
学習活動	●教師の支援	☆協同学習の要素 ★ファシリテーション技術
1 Greeting (あいさつ) Rules&Schedule (ルールと授業の予定の確認)	●今日のスケジュールやクラスルールを黒板に掲示し、活動中に意識できるようにする。	★インストラクション ★可視化 (黒板に掲示)
2 Quiz 「What is this country?」 ・国当てクイズを行い、1人ずつWBに答えを書く。	●WBを4つに分けてメモを作成するよう促す。 ●あいづちや質問を掲示し、児童が確認できるようにする。	★問い ★可視化 (ミニホワイトボード)
3 Activity 1 (リテリングの要素を含む言語活動) ・友達にある国のおすすめ旅行プランを伝え、どの国が当ててもらう。	●WBを4つに分けてメモを作成するよう促す。 ●あいづちや質問を掲示し、児童が確認できるようにする。	★インストラクション ★可視化 (黒板とスライドに掲示) ☆互恵的な関係 ☆参加の同時性
5 Activity 2 (原稿作り) ・3~4人のチームになり、紹介したい国と内容を話し合っ決めて。(WBにメモ)	●単元ゴールを再確認し、目的・相手意識をもって取り組めるようにする。	★インストラクション ★可視化 ☆互恵的な関係 ☆参加の同時性
6 Reflection (振り返り)	●協同学習や本時の学習について振り返ることができるようにする。	★インストラクション

4. 分析方法

(1) 質問紙調査

表4は、実践前後の児童の外国語学習に対する意識の変化について、量的に分析するために実施した質問紙調査の項目である。これは、事前11項目と事後14項目で構成され、協同作業認識尺度（長濱・安永・関田・甲原，2009）を基に「主体性」「協同効用」「個人志向」及び「互惠懸念」の4因子と、実践後の質問紙には「タスクの効果」に関する項目を追加して実施した。単元ごとにタスクが異なるため、パフォーマンスゴールに合わせて質問紙調査の項目を設定した。

分析の手順として、まず、「個人志向」と「互惠懸念」は反転項目のため、数値を反転させ、他のデータと測定の方角を揃えた。次に、「主体性」

「協同効用」「個人志向」及び「互惠懸念」の4因子において、Unit 2の事前事後とUnit 3終了時の児童の意識の変容を比較するために2要因分散分析を行った。また、「タスクの効果」については、*t*検定による比較分析を行い、Unit 2とUnit 3の終了時において有意な変化が見られるかどうかを統計的に分析した。

さらに、授業内に位置付けられた言語活動によって、児童のWTCが変化するかを調べるため、質問紙調査（5件法）を実施した。これは、横山（2019）を基に、全8項目で構成され、「英語をもっと話してみたい」「英語が話せるようになった」と思う活動を記述する自由記述欄を設けた。Unit 2の途中で事前、Unit 3の終わりで事後調査を行った。分析手順としては、実際の英語（L2）使用に関する質問項目（No. 6～No.8）を除き、項目No. 1～No. 5において*t*検定を実施し、実践前後における児童のWTCに有意な変化がみられるか否かを検証した。

(2) 質的分析

毎時間の授業の振り返り記述とWTC質問紙調査に設けた自由記述のデータの中で、授業への取り組み（主体性）や協同、WTC及びタスクの4点に関する記述内容に着目して記述を抜き出し、コーディングを行って分析した。結果には、データから抜粋した記述を示している。

5. 結果と考察

(1) 量的分析

表5は、第6学年児童全体の「主体性」「協同効用」「個人志向」及び「互惠懸念」の平均値と標準偏差を示している。図4は、その結果をグラフで表したものである。まず、協同学習の効果を検証するために、Unit 2事前からUnit 3事後の質問紙調査と4因子について、2要因分散分析を行った結果、事前事後の質問紙調査と4因子の交互作用が有意となった ($F(6, 168) = 3.25, p = .008$)。下位検定の結果、実践前後の「個人志向」の単純主効果 ($F(2, 224) = 4.42, p = .024$) が有意となり、Holm法による多重比較では、Unit 2の事前からUnit 3の事後における「個人志向」の得点が有意に上昇 ($p = .042$) していることが分かった。したがって、本実践は、児童の協同学習への意識を高めることに一定の効果が

表4 質問紙調査の質問項目

因子	No.	質問項目
主体性	1	外国語の授業中に、相手に自分の考えや気持ちを伝えたいと思う。
	8	外国語の授業以外でも、英語でもっとたくさんやり取りができるようになりたい。
	10	外国語の授業中に、相手の考えや気持ちを聞きたいと思う。
協同効用	2	グループのために自分ができることをするのは楽しい。
	4	みんなでいろいろな意見を出し合うことは、自分のためやみんなのためになる。
	6	一人で活動するよりも協同（協力）したほうが良い成果を得られる。
個人志向	3	グループ活動をする時、必ず手ぬきをする（やらない）人がいる。
	5	グループ活動をする時、自分の思うようにならない。
互惠懸念	7	勉強が得意な人は、グループ活動をする必要がない。
	9	グループ活動は、勉強の苦手な人たちのためにある。
タスクの効果	12	外国の人に、自分のことや学校のことを伝えたいと思い、進んで学習活動に取り組んだ。 ※U2後
	12	外国の人に、おすすめの国や旅行プランを伝えたいと思い、進んで学習活動に取り組んだ。 ※U3後
	13	友達と一緒に取り組んだスモール・トークは、単元最後のパフォーマンステストに役立った。
	14	聞き取った内容を友達と伝え合うリテリング活動は、単元最後のパフォーマンステストに役立った。

表5 各因子の平均値と標準偏差 (N=29)

	U2事前	U2事後	U3事後
主体	3.52 (0.91)	3.60 (0.98)	3.78 (0.97)
協同	3.80 (0.89)	3.85 (0.93)	4.01 (0.84)
個人	3.31 (0.76)	3.66 (0.80)	3.76 (0.98)
互惠	3.74 (0.92)	3.95 (0.71)	3.88 (0.78)

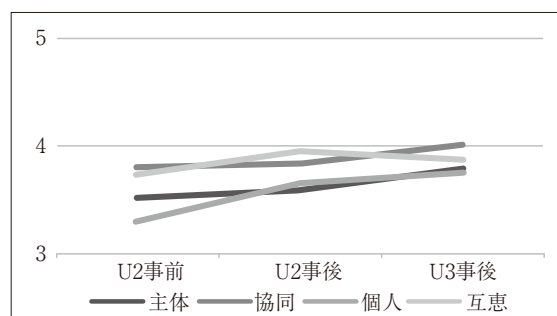


図4 各因子の結果

あったと言えるだろう。

次に、タスクの効果（Unit 2事後： $M=4.00$, $SD=1.00$, Unit 3事後： $M=4.07$, $SD=0.89$ ）を検証するために、Unit 2とUnit 3の事後の平均値に対して対応のある t 検定を行った結果、有意な差は認められなかった ($t(28)=2.05$, $p=.43$)。Unit 2の終了時点ですでに高い得点だったため、児童は、Unit 2の時点で設定されたタスクの効果がある程度感じ取っていたかもしれない（天井効果）。

表6は、WTCの調査における各項目の平均値と標準偏差を表している。WTC全体の事前と事後の平均値（事前： $M=3.45$, $SD=0.68$, 事後： $M=3.51$, $SD=0.70$ ）に変化が認められるかを確認するために、対応のある t 検定を行った結果、有意な差は認められなかった ($t(29)=2.05$, $p=.54$)。個々の項目の平均値に着目すると、項目4「進んでペアの人の話を聞こうとした」は他の項目と比較して数値が高いが、一方で、項目5「ペアの人に英語で話しかけやすかった」は項目4に比べて数値が低いことから、「進んで聞こうとした」という思いが、相手には伝わらなかった可能性があるのではないかと考えられる。対話の際のアイコンタクトやあいづち、温かな言葉かけの明示的指導の実施、及び振り返りシートに自己評価欄を設ける等の支援を行ってはいたものの、相手意識を伴った傾聴姿勢の形成には至らなかったことが一要因であると考えられる。

表6 WTC 質問紙調査の平均値と標準偏差

	質問項目	事前	事後
WTC	1 「英語でコミュニケーションをしたい」という気持ちをもち続けることができた。	3.47 (0.99)	3.73 (0.85)
	2 英語で話しやすかった。	2.50 (0.89)	2.73 (0.89)
	3 できるだけ日本語を使わないようにした。	3.70 (0.90)	3.77 (0.88)
	4 進んでペアの人の話を聞こうとした。	4.27 (0.73)	4.20 (1.05)
	5 ペアの人に英語で話しかけやすかった。	3.30 (1.16)	3.10 (1.01)
L2 使用	6 正しい英語を使って話そうとした。	3.97 (0.87)	4.10 (0.83)
	7 できるだけたくさん英語で話そうとした。	4.07 (0.89)	3.93 (0.89)
	8 ペアの人に自分の思いが伝わるように英語を工夫して話した。	3.50 (0.96)	3.77 (0.80)

(2) 質的分析

ここでは、量的分析では明らかにできない児童の内面の変化を、児童の自由記述より質的に捉えていくこととする。表7は、実践に取り入れた「協同学習」に関する自由記述を質的に分析した結果を示している。学習の過程で「発音のしかた」や「分からない英語」などを互いに「教え合い」をすることができ、それによって「友達のよさ」に気づき、「関係性の深化」や自身の知識・技能の獲得に繋がっているようである。また、1人ではなくグループで協同的に活動することで、不安の軽減と「協力による楽しさ」の実感や『達成感』を得ることができたと思われる。したがって、仲間と協同的に学習活動を行うことの必要性やその価値に気づき、協同的に学ぶことへの意識が高まっていると言えるのではないだろうか。

表7 協同的に学ぶことへの動機づけ

カテゴリー	コード	記述（原文のまま）
温かな協力関係の構築	教え合い	友達と協力して、発音のしかたなどを確にできたり分からない英語なども教え合ったりすることができた。
	協力と関係性の深化の繋がり	友達と協力した事によって仲間もふかめられた気がするし、外国語も少し教えてもらいました。
	助け合いによる友達のよさの発見と自分の知識の広がり	協力することで、友達の良さを見つけることができたり、分からないところを教え合うなどのこともでき、新しいことを知ることができて良かった。
達成感	協力による楽しさと達成感	最初は英語が言えなくて、一人でやるのがふあんだっただけで、みんなでやれて楽しかったし、英語がいえるようになった。
	協力による目標達成への安堵	友達と協力したからUnit 3をおえたので友達と協力できて良かったです。Mさんがだいじょうぶできるよって言ってくれてうれしかったです。
協力価値	協力することの価値への気づき	協力して物事を進めることの大切さを、改めて思い知らされました！
	協力して学習を進め協力のよさへの気づき	グループの皆と協力して、Unitを進められるようになった！（→皆で何かを協力する事は、良い事だと思う！）
協力意思	向上心と協力することへの意欲	次の外国語の時間は、もっと外国語をできるようにになりたいし、もっとペアやグループのために自分にできることをしたいです。

表8と表9は、タスク及び外国語の授業全体に関する自由記述を質的に分析したものを示している。児童が、相手にどのような気持ちになってほしいか、そのために何が必要かを考えながら学習活動に取り組んだことから、『目的意識』と『相手意識』が高まり、それが自分達のパフォーマンスに良い影響を与えたことが示唆された。そして、パ

パフォーマンス前は、「不安」や「読めなかった」「言えなかった」などを感じていたが、仲間との「練習の積み重ね」によりできることが増え、「目標を達成できた喜び」を感じている様子が分かる。さらに、ゲストに自分の思いを伝えられたことや、「相手が喜ぶ姿」から、それが英語への自信につながっていると思われる。

また、量的分析においては「タスクの効果」の実践前後の平均値が低く、実践を通してほとんど数値が変化しなかった複数の児童から、相手が「聞いて嬉しくなるような発表を頑張りたい」や「今日よりもさらに単元のゴールに近づきたい」などの記述が見られ、相手意識や目的意識をもって取り組んでいたことが分かった。

表8 タスクによる効果

カテゴリー	コード	記述（原文のまま）
目的意識	目的意識と向上心の芽生え	今日よりもさらに単元のゴールに近づきたい。毎日することなどをもっとうまく言えるようになりたい。
相手意識	相手意識の芽生え	学習をする前は、英語を言うときにあまり手で表さなかったりしていたけど、今日の発表では、手をふったり、相手の目をしっかりと見たりできた。
	相手意識のある目標	皆様が、聞いて嬉しくなるような発表を頑張りたいです！（動き、eye-contactなどなど）
	相手意識の高まり	楽しそうにすることをがんばり、グループのみんなでゲストに「行きたい！」と思ってもらえるような発表にしたいです。
達成感	ゲストの喜ぶ姿による達成感	学習する前は少しやりたくなかったけど、後はゲストがよるこんでくれたのを見て、やって良かったなと思いました。
	相手に伝わった達成感による学習意欲	Xさん、Yさんにわかりやすくできてすごうれしかったしこれからも英語をはきはきといえるようにならなりたい！

表9 外国語授業への肯定的な認知

カテゴリー	コード	記述（原文のまま）
自信の高まり	自信の高まりと英語学習への意欲向上	自信をもって伝えることが苦手だったけれど、今で自信がついて、笑顔で楽しくすることができました。これからは、楽しく英語を勉強していきたいです。
自己成長の認知	成功体験による自己能力認知と学習意欲の向上	前は、読めなかった英語が多かったけど、だんだん言えるようになってよかったし、これからは外国語をがんばろうと思った。
	言えるようになった達成感と喜び	学習前は、言えなかった単語がたくさんあったけど、発表して言えなかったことが全部言えるようになったから、うれしかった。
	英語を言えた達成感と自己成長の認知	自分の中では、英語が全部いえてすごく変わった。まえまでは、あまり英語が言えなかったけどがんばった。
	ゲストとの会話により、学習前よりもうまく話せ、自己成長を実感	けっこう、うまくしゃべれた。学習の前と自分が変わったかのような、せいちょうが、かんじられました。すごすぎる。
学習意欲	次の学習への意欲	練習の積み重ねによる英語でのコミュニケーションの楽しさの芽生えと自己成長の認知
		学習する前は、不安や、話すことにひていがあったけど、練習をしているうちに話すことが楽しくなった。学習が終わった後も楽しさがあったので成長できたなと思った。
学習意欲	次の学習への意欲	次の学習も、いろいろな単語を言えるようになりたい。ペアやグループのみんなといえるようになりたい。

表10は、言語活動及びWTCに関する振り返り記述を質的に分析した結果を示している。児童は、初めて体験するSmall Talkも回数を積み重ねることで活動に慣れていき、「表現できる英語が増えて嬉しい」という思いや、「外国語を表現する意欲」を高めていることが分かる。また、学習を通して、「英語への興味関心の芽生え」や英語の知識・技能の獲得から、『コミュニケーション意欲の高まり』につながったことが確認できる。さらに、『国際的志向性の高まり』がカテゴリーとして生成された。八島（2004）は、「国際的志向性が強いと、異文化への接近動機が強く、英語でコミュニケーションを図ろうとする意思（WTC）をもちやすくなる」（p. 85）と述べている。加えて、物井（2015）は、「国際的志向性が核となる概念であり、L2の学習意欲、L2によるコミュニケーション能力の認知、さらにはWTCに強い影響力を持つ」（p. 14）と指摘している。そのため、自由記述のうち、国際的志向性に関わるものも取り上げ、量的分析では見えてこなかったWTCに関する児童の意識変化に注目した。児童の中には、外国の人との関わりを肯定的に捉え、「国際的な交流への動機づけ」から、むしろ積極的に関わろうとする意欲があることが分かった。今回のパフォーマンステストは、2単元を通じて留学生3名を含むゲストを対象に実施したため、ALT以外の外国人と関わる機会が少ない児童たちにとっては新鮮であり、それが英語への興味関心へつながり、ひいては「海外への興味」を高める一因になったと推察する。本実践研究での量的分析では、WTCの変化はあまり見られな

かったが、質的分析による国際的志向性の高まりが、WTC向上のきっかけとなったのではないかと考えられる。

表10 児童のコミュニケーション意欲の向上

カテゴリー	コード	記述（原文のまま）
英語を表現できる喜び	表現できる英語が増えて嬉しい	すごく、スモールトークなどになれてきたので英語が多く言えるようになったのでうれしいです。
英語表現への意欲	外国語を表現する意欲	もっと自分でスモールトークの時にいろんな外国語を言えるようになりたい。
英語への興味とコミュニケーション意欲	英語への興味が芽生え、英語でコミュニケーションする意思をもつ	この学習を通して、英語に興味を持てたし、英語でもっと話してみたいとなった。
コミュニケーション意欲の高まり	特定の場面でのコミュニケーション意欲	グループ活動で練習をしている時に、英語を人と話してみたいと思った。 パフォーマンステストの練習、パフォで質問された時→話してみたい。
	コミュニケーション意欲と英語の知識・技能の活用意欲	U3では色々なところの英語を知ることができたので、もっと話してみたい！と思った。今回覚えた英語は何か役に立っていきたいです。
国際的志向性の高まり	国際的な交流への動機づけ	これからも外国の人と仲よくなれるようにがんばりたいです。
	海外への興味と向上心	まだまだ、知らない外国のことは、多いけれど、色々知って博士になりたいです。
	英語への興味の芽生えと充実感	学習する前より英語に興味が出てきました。とてもたのしかったです。

6. まとめと今後の課題

本実践研究では、協同学習とファシリテーション技術を用いたタスク志向の授業実践が、児童の主体的にコミュニケーションに取り組む態度にどのような効果を与えるのかを検証した。毎時間、児童を励ましながら「失敗、間違いOK!」を合言葉に、Small Talkやリテリングの要素を含む活動をはじめ、小さな成功体験を積み重ねながら授業実践を進めてきた。その結果、児童の協同学習への意識が高まり、協同的に学ぶことの価値に気づき「みんなとできるようにしたい」という意欲を高める一因になった。それは、協同学習やファシリテーション技術の導入による、児童の安心・安全な学習参加につながったことに起因すると考えられる。また、そのような学習環境の中で、仲間との練習の積み重ねが、児童同士の関係性の深化と知識・技能の獲得につながっていることが分かった。そして、留学生を含む外部のゲストに、仲間と協力しながら自分の思いを英語で伝えることができた喜びを感じ、その達成感が英語への自信や学習意欲につながっていることが示唆された。それは、外国語の学習にあまり意欲的でなかった児童が、進んでリスニング活動やペアとの対話に取り組む姿や、パフォーマンステストでどうにかして相手に伝えようとする実際の児童の姿からも明らかである。

一方で、課題は、次の3点である。(1) 本実践が児童の主体的にコミュニケーションに取り組む態度の育成に有効だったかどうかについて、精度の高い質的分析ができなかったこと、(2) それぞれの因子間の因果関係を明らかにするまでには至らなかったことが挙げられる。今後、児童の主体的にコミュニケーションに取り組む態度の育成を目指していく中で、実践・研究を重ね、明らかにしていく必要があるだろう。また、実践においては、(3) 留学生等の外部のゲストとの交流が少なく、ゲスト一人一人に想いを馳せた紹介内容にあまり近づけることができなかったことが挙げられる。留学生のこともっと知るために、インタビューを行ったり、自己紹介動画を複数回互いに交換する等、留学生との交流の機会をさらに取り入れる必要があったと感じている。

今後の外国語の授業においても、タスク志向の授業デザインを意識しながら、より効果的に協同学習やファシリテーション技術を取り入れられるよう授業実践を積み重ね、児童が互いを尊重し合いながら、認め高め合う互恵的な人間関係の構築と良好なコミュニケーションを育む外国語の授業を実践していきたい。そして、児童のコミュニケーション意欲(WTC)を高め、できる喜びを感じられる外国語の授業を目指していきたい。

謝辞

本稿は、令和5年度日本児童英語教育学会(JASTEC)第43回全国大会(令和5年7月8~9日)において「小学校外国語教育におけるタスク志向の授業実践-協同学習とファシリテーションを用いたエンパワメントな授業を目指して-」と題して授業実践報告したものに加筆・修正を加えたものである。発表に対する質問やアドバイスを頂いた方に感謝申し上げます。また、本実践に協力して頂いた小学校の校長先生と先生方及び児童の皆さんにも感謝致します。

引用・参考文献

- アレン玉井光江・阿部幸一・浜中紀子 他 (2019). 『NEW HORIZON Elementary English Course 6』東京書籍.
- 大場浩正 (2020). 「英語学習におけるファシリテーション技術の活用－ホワイトボード・ミーティング®の有効性に関する予備実践の報告－」尾島司郎・藤原康弘 (編) 『第二言語習得論と英語教育の新展開』(pp. 39-54), 金星堂.
- 加藤由崇・松村昌紀・Paul Wicking・横山友里・田村祐・小林真実 (2020). 『コミュニケーション・タスクのアイデアとマテリアル－教室と世界をつなぐ英語授業のために－』三修社.
- 志村昭暢・山下純一・臼田悦之・横山吉樹・萬谷隆一・中村洋・竹内典彦・河上昌志 (2015). 「小学校外国語活動教材と中学校英語教材の比較－タスク性と動機を高める要素を中心に－」『小学校英語教育学会誌』第15巻1号, 112-123.
- 高井季代子・大場浩正 (2022). 「小学校外国語科におけるタスクベースの授業づくり－協同学習とファシリテーションに基づき、自信をもって発表するために－」『上越教育大学研究紀要』第42巻, 145-154.
- 高島英幸 (2005). 『文法項目別 英語のタスク活動とタスク－34の実践と評価』大修館書店.
- 田中武夫・高木亜希子・藤田卓郎・滝沢雄一・酒井英樹 (2019). 『英語教師のための「実践研究」ガイドブック』大修館書店.
- 中央教育審議会 (2021). 「『令和の日本型教育の構築』を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)」文部科学省.
- ちよんせいこ (2016). 『ホワイトボード・ミーティング®検定試験公式テキストBasic 3級』株式会社ひとまち.
- 長濱文与・安永悟・関田一彦・甲原定房 (2009). 「協同作業認識尺度の開発」『教育心理学研究』第57巻1号, 24-37.
- 新潟県立教育センター英語教育推進チーム (2018). 『小学校外国語科CAN-DOリストを活用したバックワードデザインによる授業づくりパンフレット』
- 物井尚子 (2015). 「日本人児童のWTCモデルの構築－質問紙調査からみえてくるもの－」『日本児童英語教育学会研究紀要』第34号, 1-20.
- 文部科学省 (2018). 『小学校学習指導要領 (平成29年度告示) 解説 外国語活動・外国語編』開隆堂出版.
- 八島智子 (2004). 『研究と教育の視点 外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部.
- 横山吉樹 (2019). 「コミュニケーションへの意欲がコミュニケーション活動の言語パフォーマンスに与える影響について」『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』70(1), 175-184.
- Ellis, R. (2003). *Task-based language learning and teaching*. Oxford University Press.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. (2002). *Circles of learning: Cooperation in the classroom*. Interaction Book Company [石田裕久・梅原巳代子訳 (2010). 『学習の輪 学び合いの協同教育入門』二瓶社.]
- Kagan, S. (2013). *Kagan cooperative learning structures*. Kagan Publishing & Professional Development. [佐藤敬一・関田一彦 (2021). 『ケーガン協同学習入門』大学図書出版.]
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *Modern Language Journal*, 86, 55-66.

Empowering Elementary School Foreign Language Education Through Task-Oriented Classroom Practice With Cooperative Learning and Facilitation Techniques

Akie NAKAYAMA* · Hiromasa OHBA**

ABSTRACT

The purpose of this paper is to report on a task-oriented teaching practice in elementary school foreign language classes that employs the philosophy and techniques of cooperative learning and facilitation, with the goal of developing warm human relationships, which are necessary for communication, and having students engage proactively in communicative activities in English. Children achieved small success as they learned in collaboration with their peers, for example, by conducting language activities with a clear sense of purpose and partners' awareness of the performance goal under the rule, "Failures and mistakes are OK!" As a result, it was discovered that the program effectively raised children's awareness of cooperative learning and their willingness to learn collaboratively. It was found that the use of cooperative learning and facilitation techniques resulted in children's safe and secure participation in learning, and that practicing with peers in such a learning environment with a common goal resulted in the deepening of relationships and the acquisition of knowledge and skills among the children. It was also clear that the children enjoyed communicating their ideas in English to external guests, including international students, in collaboration with their peers, and that this sense of accomplishment boosted their confidence in English, motivation to learn English, and international posture.